

## 副鼻腔用バルーン・カテーテルを応用した 慢性副鼻腔炎の細菌検査

池田勝久 飯塚 崇  
楠 威志 加瀬 香 峯川 明  
順天堂大学医学部耳鼻咽喉科

【はじめに】内視鏡下副鼻腔手術は慢性副鼻腔炎に対する低侵襲手術として広く普及されている。最近、カテーテルを用いた新技術が泌尿器，消化器，心血管外科の領域に応用されてきた。同様にバルーン・カテーテルを用いた低侵襲の手技が副鼻腔炎手術にも応用され，*ballooned sinuplasty* として紹介されている (Bolger&Vaugher, 2006 ; Friedman&Achalch, 2006 ; Bolger et al., 2007)。

【目 的】本手技を用いて，各副鼻腔に存在する貯留液を選択的に採取することが可能である。副鼻腔貯留液の細菌学的検査を行ったので報告する。

【方 法】本術式の適応は薬物治療で抵抗を示す慢性副鼻腔炎で，再手術，鼻茸合併症例は適応外とした。本手術はC-アーム透視下にて，副鼻腔自然口付近に専用のカテーテルを挿入し，ガイドワイヤーの副鼻腔への導入を確認する。その後，バルーン・カテーテルを閉塞した副鼻腔自然口に位置し，バルーンを膨化させて，自然口を開大させた。副鼻腔からカテーテルにより貯留液を抽出し，細菌培養検査に提出した。

【結果および考察】5症例の上顎洞5洞と前頭洞1洞から細菌を検出した。上顎洞の3洞に嫌気性菌 (*Prevotella/Porphyromonas*, *Parvimonas micra*, *Lactobacillus* sp.) が検出された。好気性菌としては4洞で *Microaerophilic streptococcus*, 1洞で緑膿菌, *Citrobacter freundii*, *Eikenella* sp が検出された。本手技により高頻度に嫌気性菌が検出できたことは，本手技が副鼻腔の環境を修飾することなく，細菌叢を再現している可能性がある。